朝日新聞　2024年(令和6年)6月17日(月)　第3種郵便物認可

障害者と共に 挑む農福連携

寒川で野菜育て、販売

相模川河川敷に借りた「みはらし農園」で農作業に汗を流す。右から斉藤章生さん、光平さん、由紀子さん＝いずれも寒川町

元高校教諭、妻や同僚と事業所立ち上げ

県立高校で社会科を教えていた先生が、定年を機に、寒川町で障害者が働ける事業所を始めた。めざすのは、障害者が自然の中で生き生きと農作業し、耕作放棄地もよみがえらせる「農福連携」の実践。利用者はまだ息子1人だが、かつての教え子たちを思い浮かべながら、挑戦を楽しんでいる。

4月、寒川神社近くにある民家を改装し、オープンした「みはらし」は、一般企業に雇用されるのが難しい障害者に就労の機会を提供する「就労継続支援B型事業所」だ。相模川沿いに借りた約2千平方㍍の畑で、タマネギやジャガイモなど十種を超える露地野菜を育てたり、とれた野菜を袋詰めして近くのスーパーで売ったりする。

茅ケ崎北陵や茅ケ崎養護（現・茅ケ崎支援）、湘南高校などに勤め、4年前に定年を迎えた斉藤章生さん(64)が、妻の由紀子さん(57)や、同僚だった上村薫さん(65)らと立ち上げた。

きっかけは、ダウン症の長男・光平さん(25)が、養護学校卒業後に通った事業所で感じた疑問だった。

割り箸を袋に入れる、シャープペンに芯を入れるなどの単純作業で、「もう少し、多様な内容の仕事はできないだろうか」と願わずにはいられなかった。

交流拠点めざし「やりたい気持ちが道開く」

6LDKの民家を改装した就労継続支援B型事業所「みはらし」。アットホームな雰囲気で、軒先に近所の農家が立ち寄ったりする。左端が上村さん

そんなとき、家庭菜園の手伝いを、光平さんが楽しそうにやっていることに気がついた。

農業は工程に様々な作業がある上、緑に触れ合いながら外で体を動かすことができる。高齢化する地域の農家をサポートし、農地を守る一助になるかもしれない。さらに、収穫した新鮮な野菜を使った料理を食べられる産直レストランも併設すれば、地域の交流拠点になるのでは――。

定年後の「天命」に思え、企画を町役場へもちこんだ。だが、町では、B型事業所はすでに十分な数があり採算が取れない、レストランもコロナ禍で先行きが見えないと、つれない。

力になってくれたのは、障害のある子がいる保護者仲間だった。署名活動を始めてくれ、集まった約600人分に行政も後押しを約束してくれた。

途中、上下水道の整備などに想定外の資金が必要なことがわかりレストランは断念したが、章生さんが認定農家で半年の修業を積むなどして準備し、今春の開所にこぎ着けた。

大学院で哲学を学び、倫理を教えてきた章生さんが好きな思想家の一人に、武家が農民を支配する封建制を厳しく批判した江戸時代の安藤昌益がいる。

「万人直耕」。すべての人が直接田を耕すことで、支配関係のない平等な世の中になると説いた昌益の理想を目標に、農業を仲立ちに、障害のある人もない人も、互いに相手を尊重しながら集える場を模索したいと考えている。

ただ、知名度のない「新人事業所」の参入は想像以上に難しく、出だしから利用者集めに苦労している。10人はいないと採算が取れず、退職金を投じた資金繰りも心もとない。

周りが言うように、静かな「老後」を送ればよかったのか。そんな不安がよぎるとき、思い浮かぶのはいつも、生徒たちの顔だ。

40年近い教師生活の中で、誰もが無理だと思う「夢」に向かい、こつこつと努力を続けて実現させる子どもたちを何人も見てきた。「大事なのは『やりたい』と思う気持ち。それが道を開いていくことを彼らから学んだ。今度は自分の番です」

養護学校時代に出会い、サービス管理や相談支援の資格を取ってスタッフに加わった上村さんは、「障害者を『Challenged（チャレンジド、挑戦する使命を与えられた人）』と言うが、斉藤家はご家族も含めてチャレンジド。地域に根ざした福祉サービスの挑戦に、私も参加してみたくなった」と笑う。

「みはらし」はJR相模線宮山駅から徒歩5分。随時見学を受け付けている。問い合わせは（0467・73・7919）。

（足立朋子）